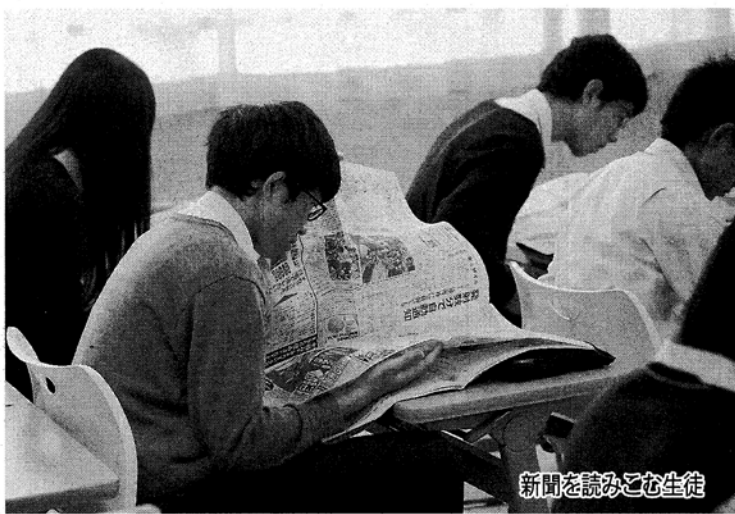


新聞の読み方を中心に行われた授業



日出学園中学校・高校で 新聞を教材に使った授業

読売東京本社と加藤新聞舗が協力

ICT(情報通信技術)教育では千葉県トップクラスの日出学園中学校・高等学校(市川市)は11日と15日、生徒のメディアリテラシー(情報を批判的に読み解く能力)養成の一環として、新聞を教材に使った授業を行った。

これは、高校2年生情報科の授業「社会と情報」。「デジタルコンテンツ演習」での新たな取り組み。読売新聞東京本社と加藤新聞舗(市川市・加藤憲一社長)が協力し、11日は2年生3クラス、143人の生徒が授業を受け、講師は元科学部記者で読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局の高野義雄氏が務めた。

高野講師は「新聞と情報の吟味」をテーマに、新聞の読み方を中心に授業を展開。読売新聞11日付朝刊を教材に使い、新聞を気軽に読むコツや就活生の新聞利用法などを紹介したうえで、新聞とテレビ報道及びネットメディアの違いを説明。とくにネットメディアとの比較では「新聞のニュースは何人もの人が間違いをチェックするので、正確で信頼性が高い。しかし、ネット情報は玉石混交で、その中から正しい情報を選ぶのは困難。ネット情報は鵜呑みにしないこと」と注意を呼びかけた。

また、在京6紙の憲法改正に関する記事に触れ「各紙の論調は違っているので、読み比べると視野が広がる。情報の吟味には、さまざまな意見があることを知ることが大切」とアドバイスを送った。

生徒が気になった見出しを選ぶ、私のいち押しニュースでは総合面の「戦力不保持・整合性力ギ」やスポーツ面の「G5発トラ止め」などが出され、生徒は選んだ理由を発表し、新聞を読む面白さを体験した。

授業を受けた男子生徒は「正確な情報を届けるために、多くの人がチェックしてつくる新聞はすごいと思った。家に新聞はあるが、時間がないので読んでいない。今日の授業で新聞に興味

味がわきました」と述べ、女子生徒は「韓国の大統領が決まったことで、日本との関係はどうなるのか父と話しました。父とはニュースを話題によく話をします。先生の説明を聞いて、新聞をじっくり読みたい気持ちになりました。中高生新聞がいいかな」と笑顔を見せた。

日出学園高校情報科では、今後も年に2〜3回のペースで新聞を教材にした授業を続け、生徒のメディアリテラシー習得に取り組み。情報科の武善紀之先生は「生徒が普段目にするウェブ記事も、出典に新聞取材記事を用いることが多く、紙の新聞を目にすることは減っても、新聞が社会に果たす意義はまだまだ大きい。信頼できるメディアの1つとして、新聞を使った授業は、情報の真偽や正確さを吟味する『情報の受信者』としての姿勢だけでなく、記事の配置や見出しの工夫、何重にも行われる校

関の仕組みを併せて知ることが、『情報の発信者』としての姿勢を養う上でも大変貴重な機会になる」と授業で新聞を使う重要性を強調した。

そして「大学受験と異なり、情報の受信と発信は一生進められるもので、その根底にある概念はどんなにメディアが発展しても不変的に存在する。生涯使える『メディアリテラシー』を新聞を使って生徒たちにさらに深く根付かせていきたい」と抱負を語った。